P-47 新設されたNICUに勤務する看護師への教育的介入による変化 ―質問紙調査を通して―

○加藤 明美[1)]、山本 房美[2)]、岩月 悦子[3)]、汲田 明美[4)]、柴 邦代[4)]、服部 淳子[4)]、山口 桂子[5)]

1)愛知県心身障害者コロニー中央病院、2)名古屋市立大学病院、
3)あいち小児保健医療総合センター、4)愛知県立大学 看護学部、5)日本福祉大学 看護学部

【目的】NICUでは、一般の小児看護とは異なる家族看護の提供が必要とされる。そこで、新設されたNICUに配属された看護師に対する教育的介入を行い家族看護に対する認識やケア内容がどのように変化するかを明らかにし、考察することを目的とした。本報では、介入前後に行った質問紙調査の結果を報告する。

【方法】

1. 対象及び期間

A小児病院に新設されたNICUに所属する看護師のうち、同意の得られた19名を対象とした(201X年10月～201X+1年3月)。

2. 教育的介入の内容

教育的介入は、NICUに入院する子どもを持つ家族の特性の理解に着目し、質の高い家族看護実践へ向けた個々の看護師と病棟全体の変化を目標として、研究者である、NICU管理者と家族支援専門看護師が以下の内容で行った。

①集合教育：病棟開設直後に、「NICUにおける家族支援」をテーマに30分間の講義を行った。

②ケアカンファレンス：日々の家族看護に関するリフレクションを促す介入を行うため、研究者がファシリテーターとなり毎月1回、実施した。

3. 調査内容

1)臨床経験及び家族看護に関する継続教育の機会や実践度

2)各自が目指すNICUにおける看護目標

3)NICUにおける家族ケアの質評価指標：Family-Centered Careや「重篤な疾患を持つ新生児の家族と医療スタッフの話し合いのガイドライン」(日本新生児成育医学会：2004)を参考に研究者らが作成した全14項目(とてもそう思う7点～全く思わない1点とした7段階リッカート尺度)

4. 分析方法

無記名による2回の調査について、上記の1)・3)は記述統計を中心に分析し、2)についてはコード化して内容の類似性と相違性により分類し、その変化を検討した。

5. 倫理的配慮

A病院倫理委員会の承認を得た後、対象者個々に、研究の主旨、倫理的配慮について説明し、書面により同意を得た。

【結果】回収率は2回とも94.7%であった。看護師の臨床経験は半数以上が11年以上であり、家族看護に関する研修会や学会への参加などがあると回答したのは、13名(68.4%)であった。

1. 質評価指標に対する回答の変化

14項目の回答は概ね「望ましい」方向への変化を示したが特に「母親の子どもに対する否定的な発言は特別ではない」「治療の中止決定後は、家族ケアを控えた方がよい」の2項目は、介入前後で20%以上大きく増加した。

2. 看護目標に関する自由記載の内容

介入前は、「新生児を理解した上での最善のケア」「愛着形成を促す」「家族の思いに寄り添いながらも、治療とのバランスを考えチームで援助する」などの回答があった。介入後は、「出生前から家族と関わりを持つ」「面会環境の整備」「退院後を見据えたケア」「きょうだい支援」などの回答があった。

【考察】質評価指標については、家族看護の視点から見て全体的に望ましい回答が多かったが、介入後はその割合がより多くなっていた。同様に、自由記載からは視点の広がりがみられ、目標の理解が深まったと考えられる。